中学生のもついじりのイメージ

大学生データとの比較

○望月正哉¹・吉澤英里²・瀧澤純³・澤海崇文⁴

(¹ 日本大学・² 環太平洋大学・³ ノースアジア大学・⁴ 流通経済大学)

キーワード：いじり・対人コミュニケーション・横断的比較

Impressions of *Ijiri* perceived by junior high school students as compared with those by undergraduate students

Masaya MOCHIZUKI¹, Eri YOSHIZAWA², Jun TAKIZAWA³, and Takafumi SAWAUMI⁴

(¹ Nihon University, ² International Pacific University, ³ North Asia University, ⁴ Ryutsu Keizai University)

Key Words: *Ijiri*, Interpersonal communication, Cross-sectional comparison

目 的

対人コミュニケーションにおけるいじりとは、送り手が受け手を小ばかにしたり、無理を言って困らせる側面があるものの、仲良くなるためであったり好意をもったやりとりであると捉えられている行動である(望月他, 2017)。一方で、特に受け手はこの行動に否定的な気持ちを抱くこともあり(望月他, 2015)、いじめとの関連も示唆されている(本間, 2009)。このような捉えられ方は主に大学生を対象とした研究で明らかになったものである。いじめの認識は小中学校生と大学生で異なることが示されており(笠井, 1998)、いじめ予防の観点からは、小学生・中学生を対象にした研究が求められる。そこで本研究では中学生を対象にいじりの印象について尋ね、大学生がもつ印象(吉澤他, 2017)と比較した。

方 法

調査参加者 N 県の私立中学校 2 年生 84 名(男子 40 名、女性 40 名、性別未回答 4 名)が調査に参加した。倫理的配慮として事前に中学校教員に調査内容の確認および許可を得るとともに、調査実施時に生徒に対し調査協力は自由意思に基づくことを教示した。調査は日本大学文理学部研究倫理委員会の承認を受けた。また、比較として吉澤他(2017)の大学生・大学院生 249 名のデータを使用した。

調査項目 いじりの印象を尋ねる 12 項目(7 件法)を使用した。これらはからかいの印象について尋ねた遠藤(2008)をもとに、より多面的な印象を捉えられるよう項目を追加したものであった。この他に性別、年齢、自身が他者をいじる頻度と他者から自身が いじられる頻度(5 件法)、適応感(大久保・青柳, 2003)を尋ねた(適応感とは本発表では報告しない)。

手続き 調査は心理学に関する体験授業のなかで実施した。質問紙を配布し、協力の自由と回答方法に関する教示をした後に自己ペースで回答させた。回答時間は約 10 分であった。

結 果

印象を尋ねた 12 項目に対して最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を実施した。いずれの因子に対しても因子負荷量が十分に高くなかった 2 項目を除き、再度同様の分

Table 1 分析に使用した印象を尋ねる項目

因子名	項 目	F1	F2	F3	共通性
肯定的印象	いじりは嬉しい気持ちになる	.731	-.039	-.046	.518
	いじりは好意を伝えるものだ	.710	.065	-.125	.379
	いじりは和むものだ	.586	-.049	.088	.446
	いじりは楽しくなる	.559	-.007	.269	.578
否定的印象	いじりは苦痛を感じる	.107	.874	-.003	.697
	いじりは悲しくなる	-.030	.741	.039	.549
	いじりは不快になる	-.087	.685	-.020	.539
	いじりは悪意を伝えるものだ	-.009	.400	.003	.162
	周囲の反応	-.047	-.021	.904	.778
	いじりは盛り上がる	-.012	.040	.788	.591

析をした結果 3 因子が得られ、肯定的印象、否定的印象、周囲の反応とした(Table 1)。これらの因子に含まれる項目の平均得点を印象得点として以降の分析に用いた。

この印象得点を目的変数、学校種(ダミー変数)、いじり頻度、いじられ頻度(中心化)を説明変数とした階層的重回帰分析を実施した。肯定的印象得点では学校×いじり頻度×いじられ頻度の交互作用が有意であった($\beta = .18, p = .006$)。いじり頻度といじられ頻度の平均±1SD で群分けして単純傾斜分析を実施した結果、いじり低・いじられ高群で学校種の差がみられ、中学生の方が肯定的印象の値が高かった($\beta = -.33, p = .003$)。また、いじり高・いじられ高群でも学校種の差がみられ、中学生の方が肯定的印象の値が低かった($\beta = .22, p = .03$)。否定的印象では学校種×いじり頻度の交互作用が有意で($\beta = -.16, p = .02$)、単純傾斜分析の結果、いじり高群で中学生の方が高い傾向であった($\beta = -.13, p = .08$)。周囲の反応得点でも学校種×いじり頻度の交互作用が有意で($\beta = .16, p = .01$)、単純傾斜分析の結果、いじり低群で中学生の方が高かった($\beta = -.19, p = .02$)。

考 察

いじる頻度といじられる頻度が両方とも多い場合に中学生は大学生に比べ肯定的印象が低い、いじる頻度が少なく、いじられる頻度が多い場合には中学生で肯定的印象が高くなることが示された。これはいじられることだけが多い中学生は自己に注目が集まるということに肯定的な評価をしているとも考えられる。一方で、(特にいじり頻度の低い)中学生は周囲が反応するという印象をもつものの、いじり頻度が多い中学生はいじりに対して有効な反応が得られないなどして肯定的な印象が下がり、否定的な印象が上がっているとも解釈できる。一方で、大学生では、いじる頻度が多いと中学生よりも肯定的印象が高く、否定的印象が低くなる傾向がみられている。これは送り手、受け手とも肯定的印象になるようないじり行動を把握できる人が、その行動を行ったり、受け入れられたりすることでいじりを肯定的に評価しているとも考えられる。

本研究では、行動の頻度は自己評価であり、行動の内容も問うておらず、実際場面を必ずしも反映しているとは言えない点は留意が必要である。また、1 校 2 クラスと中学生のサンプルサイズも小さく、中学生のいじり行動の実態を把握するためには、さらに大規模な調査が必要といえる。

引用文献

- 遠藤 (2008). 関西大学社会学部紀要, 39, 1-16.
 本間 (2009). 児童心理, 63, 530-534.
 笠井 (1998). 教育心理学研究, 46, 77-85.
 望月他 (2017). 対人社会心理学研究, 17, 7-13.
 望月他 (2015). 日本心理学会第 79 回大会発表論文集 112.
 大久保・青柳 (2003). パーソナリティ研究, 12, 38-39.
 吉澤他 (2017). 日本社会心理学会第 58 回大会 166.